

持つ母の同じ情で、唄に奪られた下駄の鼻緒をたて、くれて——「坊ちゃん、おひとり……」——ね、孤し兒になつてもいい、と、勿体ないが思ひました。

が、姉弟は唄ふ……さーとの、わたりーの、ゆふまぐれー……でも、姉さんの、瑞々しい声が——せめて東京の空まで渡れと——胸一ぱいに唇を衝いて出ても、泥の田舎の田甫の風は、可憐な唄にも用捨はない。すぐ、きれぐれに吹き飛ばして、街道の埃と一緒に、はかなく白く、廂の下から父の鞆匣の火に吹きつけて……赤い火ばかり、ぼうと靡く……しまひには、稚い子は疲れたものか、しょんぼりやめて、松の根もとに踞んでしまひ、姉さんの唄ばかりが——寒い薄明りの中に顛へてゐた……

それが、リーダーの隅の小口が、半分もまだ汚れないうちに、渡り鳥は、また旅に流れて、風にまかせた巢の中へは——此奴、憎ていな馬車屋が入った……

——後日、或る夏、難しい試験に出掛けた京都の、あれは、吉田といった町の端れの村の銭湯で、柿色の暖簾をくぐると、顔を合せたのが、ことによると——その、何なんで——翌る朝の試験は驚いて落第した。といふわけなんだが……さうなるともう小説の部で、いや……美しいより怪しくなつて、いよくそら、番町の作者の城なんだから——素人はたゞ、東海道の、ハハ、昔のむかしの、夕暮の風にめくれた覚え書で……

冬ざれや堤のうへの童唄

(曲水9-6)

〔短文〕

車中より

この車室は大へん空いてをります。私の居る他の窓側には姉妹らしい十四ばかりと九つ位の女の子がをります。姉さんの方は大へん美しくて凜々しい、そしてどことなく峯がある魅力を持つた顔で何だか行末が案じられます。しかし目下は小さな手帖に鉛筆で何か行儀のい、文字を並べてゐます。一寸した手帖の押へ方、眼の配り方にも申分ない才智のひらめきが窺れます。小さい方は又何とも云へない可笑味のある、あどけない絶えず睫毛に笑を浮べて居ると云ふやうな顔です。でも博多の伊達巻をキチンとじてゐます。さつきから度々涙をかみます、そして後から小さい懐ろ鏡を出して桃色の打粉を鼻の頭へ打ちます。その度びに鏡の影が後ろの破目にチラチラ動きます。姉さんの着物は濃い浅黄の紋り。やがて一つ先きの席に居る兄弟らしいのが飛んで来て姉さんの鉛筆をひったくって行って、真黒い汚い顔をよせて何かしらいたづらをたくらんでゐます。この兄弟姉妹の従者、これも姉弟らしい二人は二組の間で吞気らしく居眠りしてゐます。(八月十日午前十時戸塚駅にて)

(大正7年・曲水3-4)